

TAKE FREE

BLUE + GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

この町には鹿がいる。
Thinking About Deer

07
Seventh ISSUE

鹿は夜行性。奥多摩町民でも、日中、彼らに遭遇することは稀だ。迫力ある写真撮影したのは、標高800m弱の天空の集落「峰谷」に暮らす酒井卓真さん。「林道を走行中、車の前に飛び出しそのまま道に行きました。逃げるかと思ったら車から10~15mほどのところでこちらをうかがっていました。そーっとカメラを出し撮影開始。5分ほど撮影させてくれたあとゆっくり山に去っていきました」



Photo: Takuma Sakai

THINKING ABOUT BEER

この町には鹿がいる。

静かな宵のうち、車を走らせると、ヘッドライトが突如大きな影を捉える。立派な角、堂々とした佇まいはまるで森の神の化身のよう。

鹿 = Deer。

東京の片隅にあるこのまちでは、その存在がとても身近だ。

害獣か？ 癒やしの存在か？ 神の使いか？

山と森と町がせめぎあうこの奥多摩で、鹿と人との未来について考えてみたい。

MARK 1 樹皮に見られる痕跡



見事なまでに削り取られた樹皮。このような樹木は奥多摩の山林ではどこでも普通に見られる。右の写真は動物の爪痕が確認できる樹木。おそらく小動物が幹を駆け上った跡だろうか。

MARK 3 土に残る、足跡



注意深く山道を観察すれば、このような鹿の足跡を確認できる。餌を求め、人知れずここを歩いていた鹿を想像してみる。

MARK 4 立派な角を発見



月夜見山を下り、山のふもとと村へ移動。ここでは落ち葉の上で雄の角を発見。毎年春先に角を落とし、新しい角を生やす鹿。1年でこんなに立派な角ができるとはちょっと驚き。

DEER TRACKING IN OKUTAMA

山林の奥深く、
鹿の痕跡を追って

MARK 2 引きちぎられた草木



このような状態の低い丈の草木は、鹿が引きちぎった跡である可能性が高い。上アゴの前歯がないため、引きちぎるようにして草木を食べる。

MARK 5 毎日約4kgの草木を食べる



毎日、乾燥重量で約4kgほど草木を食べる鹿。間違いなく、ふんも相当の量になる。奥多摩の山林で鹿のふんを探すのはそう難しくはない。

Navigator 田畑伊織さん

インタープリター(自然解説員)/東京・奥多摩をメインフィールドに動植物の調査活動を通し、自然公園の価値を追求。その知見を活かし、普及教育活動・人材の育成などに力を注ぐ。とりわけ東京都のカモシカの動向調査と西多摩の植物相研究をライフワークとしている。

かつて、東京にはたくさんの鹿が住んでいた。江戸時代あたりは、井の頭公園付近で普通に鹿が見られたというほど、台地、丘陵地まで鹿の居住エリアは広がった。とも。そして、都市化が進行すると鹿たちは自然の色濃く残る奥多摩の山々へ押し込まれていった。天敵のいない平安の地で、彼らはどんどん増殖。今では増えすぎた鹿達が奥多摩の森のなかを闊歩し、様々な影響を及ぼしている。

そんな鹿たちの痕跡を探すミニトリップへ僕らは出かけた。奥多摩周遊道路から月夜見第二駐車場を経て、山へ。山中を先導してくれたのは東京の動植物調査や奥多摩における植物相研究のエキスパート、田畑伊織さん。山を歩き始めてほどなく、鹿の仕業と思われる痕跡は次々と見つかった。

「これはリョウブという樹木。鹿はこの樹皮が大好きでそのエリアに鹿が侵するとまず狙われる。冬場の餌としてかじっているんじゃないか」

周囲を見渡すと、樹皮がべりりと削られた樹木が至るところに。樹皮がはがれているのは、ちょうど鹿が首を伸ばして食べられそうな高さだ。「少し歩くだけでも、森が良い状態じゃないってことは感じる。生えているはずの草や低木がほとんどない。灌木が残っているようにも見えますが、これらは鹿が食べない種類の樹木ばかりです」

一見、静かで緑豊かな森だが、あたりは食べ散らかされた枝葉ばかり。歩を進めていくと、しばしばぬかるみに足をとられるようになった。まるで誰かがきれいに落ち葉拾いをしたように山道の土が露呈している。冬場の山中、よく考えると普通じゃない光景だ。田畑さんは足を止め、こう話した。「鹿たちは冬場、落ち葉を食べる。奥多摩の森で全国的に見て落ち葉が非常に少ないんです。落ち葉が少なければ雨滴が直接、地面を叩くでしょう。奥多摩は急傾斜が多いので土が緩み、表土が流れやすくなる。突き崩しといって鹿が歩き回することで表土が荒れることも土砂は崩れやすくなります」

奥多摩が誇る東京都最高峰の雲取山でも、80年代頃と比べ、その風景は一変した。例えば赤紫色の可愛い花を咲かせるヤナギランなどが、お花畑と呼ばれるほど華やかな光景を演出していた、かつての雲取山山頂付近。今では根こそぎ鹿にやられ、美しい花々はほとんど見られなくなってしまった。この月夜見山でも歩けば歩くほど、ふんや角の跡、植生の少ない土が露呈した山道など、鹿の痕跡が視界に入る。彼らが荒らす山林とふもとの町の未来はどうなっていくのか。にわかに不安が増幅する。

「これから森がどうなっていくのか、答えは誰にも分かりません。まずは一人でも多くの人が鹿や獣害について知ることが大切ですね。そもそも都市化を進め、山の環境を変え始めたのは人間です。林業、農業、観光業、そして住民など様々な立場の方々にとって、理想の山林の姿がきっとあるはず。鹿がその山林からまったくいなくなった未来が果たして正解でしょうか。そのような意見をすり合わせながら人の手によって健全な森にしていかなければならないのですが、鹿の適正な頭数というのが非常に難しい。確かに今、奥多摩の山林は荒れている側面もありますが、だからといって鹿だけを悪者だと決めつけても、おそらく問題は解決しない。難しい問題ですが、長い時間をかけて議論や行動を積み重ね、人や動物が恒久的に暮らしていける奥多摩になっていけば嬉しいですね」

そんな会話を重ねながら僕らはさらに山の奥へと進んでいく。道中、果てしなく鹿の痕跡が続いているようにも思えた。ふと考える。自分の住む町に鹿たちが暮らしているなんて、実は、素敵なことじゃないか。彼らとうまく共存していくベストな道はたった今、思い浮かばない。でもやっぱり、この鹿たちが駆け巡る山林であり続けてほしい。不安と希望と理想が次々と頭をめぐる。山歩き。まだまだ山頂は遠いようだ。

"TOKYO DEER" TIMELINE CHART

PHASE1



明治時代から戦後

奥多摩町、檜原村、青梅市南部にかけて分布していた鹿は奥多摩湖から北の地域に分布域を縮小。60年代後半頃から山奥のスギ、ヒノキ造林地に被害が報告され始める。この時代、山野草であるスズタケは奥多摩・日原で密に見られたが、現在では鹿に食べつくされて消失し、見ることはできない。ちなみに60年代後半から70年代前半には毎年、10頭前後の鹿が捕獲されているのみだった。

PHASE2



1970～80年代

70年代半ば、鹿生息実態調査(現・林業試験場実施)によって生息域の縮小と個体数の減少が著しいと報告され、1976年には奥多摩町を雄鹿捕獲禁止区域に制定(5年間)。結果、奥多摩管内で植栽したヒノキ苗に被害が発生し始める。80年には造林木のほか、ワサビにも被害が見られ、日原付近では農作物にも被害が。一方、86年には絶滅の恐れがあるとして捕獲禁止措置がさらに5年延長される。

PHASE3



1990年代

90年代半ば頃より奥多摩・天祖山周辺でモミの枯れが発生。90年代後半には日原川流域、奥多摩湖、多摩川流域に農作物被害が拡大。ワサビ被害は一部、青梅市にも及ぶ。同時期、小河内ダム周辺のサクラ林で剥皮、枝折れなど被害が拡大。93年には奥多摩町で有害鳥獣駆除が開始される。94年には20頭、96年には72頭、99年には207頭と年々、鹿の駆除頭数は増加。

鹿の生息頭数
1993年 386(±249)頭*
労働経済局による奥多摩町の鹿生息実態調査で判明した数字。

PHASE4



2000年前後

90年代後半より奥多摩町から青梅市北西部、檜原村北西部に鹿の分布域が拡大。2000年には青梅市でも駆除が開始される。同年、東京都野生動物対策連絡会発足。02年には奥多摩町で雄鹿捕獲が解禁される(同年の捕獲数は325頭)。小雲取山、山梨県将監峠、笠取山付近の森林で防鹿柵、単木ネットが設置される。

鹿の生息頭数
1999年 982(±304)頭*
6年前と比較し600頭以上増えたことになる。この年、年間207頭が捕獲されている。

PHASE5



2000年以降

2004年、豪雨により奥多摩の水根沢から褐色の沢水が多摩川本流へ流れ出る。加えて奥多摩町氷川の鹿被害地から土砂が流出し、下流の水道施設に被害を与え、取水不能となる。こうした被害は鹿によって摂食された幼樹が枯死したり、踏み荒らしなどによってむき出しになった山腹斜面より土砂が流出したものとされる。このような状況を踏まえ、特別捕獲、治山、防鹿柵、砂防などの緊急対策が実施される。

鹿の生息頭数
2002年 2560(±1810)頭*
産業労働局(旧労働経済局)による調査で判明した数字。1993年の調査時から比べ、驚くほど鹿の頭数が増えた。

Future?

今後も、鹿の目標密度、目標頭数を決め、狩猟などによってその数へと誘導していく。その際、問題となるのは狩猟者の高齢化や、生態系保全、野生動物の保護管理に関わる人材の育成だ。様々な側面から人間が協力しあわなければ、鹿と共存する理想の奥多摩は築けないのである。

*分布エリアの面積と生息密度から算出した頭数であるため、誤差が生じる

よくわかる、鹿対策の歴史

東京都に棲む鹿と人との関わりについて、その変遷を時代別にまとめてみた。果たして、未来はどちらの方向へ？

春先、森の中を歩いていると、天然のオブジェを発見することがある。鹿の角だ。といっても、屍の一部などではない。興味深いことに、鹿の角は毎年生え替わる。4月頃に自然にポロンと抜け落ちると、すぐにまた新しい角が生え始めるのだ。この頃の角は、表皮を被っている状態で触ると柔らかく、表皮の下を血液が流れていて温かい。ふわふわの短毛が覆っているような状態で、袋角という。夏に向かって角はぐんぐんと成長。繁殖期の秋を迎えると、表皮が剥がれゴツゴツと骨化し、オス同士で激しく角を突き合わせたりして、角の存在意義が発揮されることになる。そう、角が生えるのはオスだけののだ。

鹿の角は、年齢とともに形を変えていく。1歳頃から生え始める角は、1本の状態。2歳を迎え、新たに生える角は2又に枝分かれて伸び、3歳になると3又に、4歳以上の成熟期になると最終的には4又になる。毎年生え替わるのに、不思議なものだ。

そんな鹿の落とし物を、森の中で運良く拾ったら、そのまま飾るのもいいけれど、好きな形に加工してハンドメイドしてみるのも楽しい。骨とほぼ同じ構造の角は、中に髄液が残っていることも。熱湯で20～30分グツグツ煮込めば、匂いもとれ、キレイな状態になる。ノコギリで好きな大きさに切りヤスリで磨き、穴を開けて紐を通せば、それだけで十分素敵な代物に。技術があれば、ペーパーナイフにしたり、笛を作ったり、なんてことだってできる。

どことなく山を想起させる色・形・模様は、百個百様。その手触りも、ルックスも愛せずにはいられない。



右は笛、左はペーパーナイフ。アイデアと技術次第で、鹿の角が様々なアイテムに変身。クラフトセンター製作:山のふるさと村

奥多摩町内でゲット! シカツノアクセサリー



鹿角キーホルダー 各500円
製作:山のふるさと村 クラフトセンター

町内で駆除された鹿の角を有効活用。「山のふるさと村 クラフトセンター」で製作されたアクセサリーは、奥多摩観光協会などで販売。角を輪切りにしたタイプと、角の先端を磨いたタイプの2種類。鹿角のアクセサリーやペーパーナイフの製作体験(1人400円)も人気。



奥多摩ガチャボン 1回300円
製作:多摩大学 経営情報学部 松本祐一ゼミ

多摩大学の学生たちによる町おこしの一環として、奥多摩町の魅力が詰まった「奥多摩ガチャボン」が登場。ガチャボンの目玉商品は、奥多摩町で採れた鹿の角のアクセサリー。ネックレス4種のほか、プレスレットやイヤリングも。奥多摩駅2階「ポート・おくたま」にて販売中。



表面のゴツゴツとした模様は、血管が流れていた痕跡だという

FINDING NATURAL ARTS

美しき、鹿の落とし物。

OKUTAMA DEER SUMMIT

奥多摩 [鹿] サミット

奥多摩の森で増え続けている鹿は、近年人家周辺でも目撃例が増加している。この町に暮らす住民たちは、どう感じているのか。鹿とヒトとの未来について、ざっくばらんに意見を出し合ってもらった。

Photo: Masaki Okabe

——最初に町役場の三浦さんから、奥多摩の鹿に対する捕獲活動について説明していただけます。
 三浦 ● 毎年目標を350頭に設定して捕獲活動を行っています。令和元年度は2月末までに178頭を捕獲しており、過去五年間で最多です。ちなみに平成27年度は127頭、平成28年度は165頭、平成29年度は142頭といった数で、目標の350に対してもっとも捕獲していかなければならないという状況が続いています。本年度で見ると、人家周辺の捕獲頭数は116頭で、奥多摩の市街地に鹿が出没しやすくなってきているのかなと感じています。町のために新たに多くの若い方に狩猟者となっていただくことが大切だと思っていますね。
 ——5年前、奥多摩に移住してきた井田さんは、鹿が増え続けていることについてどう感じていますか？
 井田 ● 正直、普段の生活で鹿と遭遇したことがないので鹿が増え続けているという実感はないんです。でも近所の畑が荒らされているなんて聞くと、やっぱり解決しなくちゃいけない問題なんだと思いますよね。
 ——人間と鹿たちが暮らす奥多摩の近未来について、なにか良いビジョンがあれば教えてください。
 井田 ● うーん、単純に鹿を減らせればいいとは思っていないし、このままでも難しいでしょう……。鹿の力を借りて町おこしというのはどうでしょう？餌を

あげる機械やお土産屋、レストランなどもある鹿パーク、楽しむだけじゃなくて獣害の問題をしっかりと紹介していくコーナーを作るとか。このパーク全体が奥多摩のPRにもなるし、鹿と人との関係も続いているようなイメージですね。
 ——とても面白いアイデアです。実現できたら観光客も増えそうですね。奥多摩で釜めし屋を営む岡部さんは、この土地で生まれ育ちましたよね。毎日の生活と鹿との接点ほどの程度、ありますか？
 岡部 ● 小さい頃は民家の周りに鹿がいるっていうシーンを見た記憶がなかったんです。でも今は鹿が増え過ぎちゃって、人間の暮らしとの境がなくなっているのが問題ですね。そう考えると数十年で状況は大きく変わったんだと感じます。とにかく鹿が増える原因について皆で考えて、撃つておしまいでことだけじゃない根本的な解決に向けた方がいいと思う。やっぱり気持ちとしては僕も共存共栄なんですよ。だから人間はもっと山の手入れをして、鹿が人里に来ないよう頑張らなといけな。同時に、鹿肉の活用法がもっと幅広くってくればいいな。奥多摩に来ればどこでも美味しく、それぞれにオリジナリティある鹿肉が食べられるとか。害獣っていう側面はもちろんあるんですけど、食肉を始め、鹿が町おこしにつながっていくような存在になればいいと僕も思っています。個人的には写真が趣味なので、鹿を魅力的な被写体として見ていますけどね。

——医師である片倉さんはお自宅で家庭菜園を楽しんでいらっしゃいますね。鹿に対してどんな感情をお持ちですか？
 片倉 ● 一昨日はイノシシが家の前を……。猿だってトマトやジャガイモ、掘って食べていく……。猿は電気柵をうまく逃げていくし、イノシシは電気柵を掘って突破するでしょ。だから僕にとっては猿とイノシシがブーイング度5(笑)。あとテンとかハクビシンも厄介で、うちの鶏が食べられたこともある。ブーイング度2ですね。アライグマは生ゴミひっくり返したり、カモシカだって大根を大量にやられたことがあるし。だからブーイング度1くらい。それで鹿はといえば、あんまり迷惑被ってないんです。だからブーイング度0。鹿が獣害って言われても、僕にしては全然違うんだらうけど、畑だけで考えると注意すべきは鹿よりカモシカなんですよ。
 ——鹿が樹木や山を荒らす一方、人の暮らしに直接、害を加えることは少ないという、リアルなご意見でした。ところで加藤さんは奥多摩で狩猟に関わっていますね。駆除の最前線に身を置き、鹿肉が食べられるとか。害獣っていう側面はもちろんあるんですけど、食肉を始め、鹿が町おこしにつながっていくような存在になればいいと僕も思っています。個人的には写真が趣味なので、鹿を魅力的な被写体として見ていますけどね。

鹿を餌にかけるとのこと。そう考えると銃より罠猟への比重を高めていってもいいのかなと。ただ罠猟の場合は監視が必要で、鹿がかかってもそのまま放っておくわけにはいきません。罠がきちんとした状態であるかチェックしておかないといけません。ですから町民の方の協力が必要になってくる。罠をかけるには資格が必要ですが、そこに動物がかかっているかどうかの連絡を多くの方に協力いただければと。
 ——それでは今後、奥多摩の山林と鹿の数はどのように推移していくと予想しますか？また、人間にできることはどんなことだと思いますか？
 加藤 ● 鹿の頭数に関しては、極論放っておけば食べるものがなくなり減って行きます、同時に山は荒れますが。しかし鹿が減れば森林も戻ってくるというのが自然の摂理です。それを管理するのであれば、人間がどどん山に入って、スキヤヒノキの山林をきちんと手入れし、下草が生えるようにしていくこと。そうすればわざわざ鹿が樹皮を剥いで食べることも減るでしょう、人間が山に入ることによって鹿には圧がかかって住み分けが出来て、結果として人にも鹿にも良い方向に向かっていくような気がするんです。
 ——それぞれの立場から、鹿と生活との接点をお聞きできました。印象としては鹿の被害を心底感じている方はいなかったのではないのでしょうか。それでも近未来には鹿の害がさらに深刻化し、町民

どうなる？ まちと暮らしと鹿の未来



加藤ひろしさん
 愛知県名古屋出身。地域おこし協力隊として2018年7月に奥多摩町に移住。移住し9理由は「狩猟がしたいから」。狩猟免許保有。奥多摩猟友会の一員として、有害鳥獣駆除を行う。ジビエ料理が得意。
<https://twitter.com/okutamahia>



岡部正樹さん
 奥多摩生まれ、奥多摩育ち。「鹿の罠釜めし」店主。奥多摩に広がる豊かな自然風景や野生動物を撮り続けるアマチュアカメラマン。この企画で掲載している鹿の写真も、岡部さん撮影によるもの。
<http://hatonosukamameshi.com>



井田直子さん
 「奥多摩むかし道」沿いにある休み処「茶屋榊」オーナー。2015年3月に神奈川県川崎市から奥多摩町に移住。家族5人+猫3匹+犬1匹の大家族で、奥多摩暮らしを満喫している。趣味はバイク。



片倉和彦さん
 双葉会診療所院長。内科・精神科医。長野県北安曇郡にある病院から、奥多摩町へ移住。奥多摩町立病院勤務を経て、1995年より現職。自宅からほど近くの場所で、家庭菜園を楽しんでいる。



三浦大輔さん
 奥多摩町役場職員。2018年、役場に奉職と同時に観光産業課農林水産係に配属される。主に有害鳥獣対策を担当する。

やっぱりワクワクしますからね。彼らにしても人間に害をもたらしたいわけじゃないので、人間はきちんと自衛するとか、鹿が住みやすい環境について気を配るといことをしうかりやうていくべきなんですよ。
 ——畑を楽しまし上で鹿の影響はないと話していた片倉さん。鹿との共存共栄についてはどう感じますか？
 片倉 ● やっぱり私には猿とイノシシが問題であって、鹿は問題視していないから(笑)。私も鹿の鳴き声、好きです。こういうこと言うと、林業の方には申し訳ないと思いますけどね。
 ——鹿、猿、イノシシに関して、奥多摩における被害はどの程度のものなんでしょうか？
 三浦 ● 声高に聞こえてくるのはやはり、イノシシ、猿の被害なんですよ。イノシシなんかは頭でも人間の領域に入ってくるとチェックチャにいきますからね。猿にしても一口食べては捨て、一口食べては捨てと、派手です。鹿の場合、見た目の可愛さもありますけど、若い芽や樹皮を食べることで、山が荒れていくというのは事実ですから、鹿だけ放置しておいて良いということはないんですけどね。近年では、鹿がわさびの葉っぱを食べるとい報告が農家さんから聞こえてきます

ね。食べるものが減ってきてからわさびに手を出すようになってきたんだと思います。
 ——ところで、加藤さんは近未来に向けて、ユニークな活動をされていますよね。
 加藤 ● 買シェアリングという活動で、狩猟免許を持っていない人でも、「ここに罠をかけたい」と言ってくれば僕らのように免許を持っている人間がその場所に罠をかけ、動物がかかったらその依頼者の手柄にしてあげる、といった内容です。たとえば鹿が頭獲れれば、肉はこれだけあるんですよという事実も、処理を手伝いながら知っていくという。猟果もみんなシェアしようということですね。
 ——この活動の効果というか、狙いはどこにあるんでしょうか？
 加藤 ● 奥多摩、檜原、あきる野で実施しているんですが、猿や鹿に対する理解が深まったり、それによって興味を持った方が移住してその地域に住む人が増えたり、人が増えることによって被害が減ったり。買シェアリングでは動物を捕獲するだけではなくて、山菜採りや川遊び、キノコ狩りといった山体験を通してその地域の暮らしに興味を持ってもらうことを目的としているんです。
 ——なるほど。猟も含めた地域の暮らしに興味を持ってもらい、結果として移住者が増えていくというのは理想的な流れですね。猟に対して拒絶反応を示す方がいるとも聞きますし、いくら害を及ぼす

からといって、殺すことはないだろう、と。
 岡部 ● 少し話しがそれるかもしれませんが、アメリカのエイロストーン国立公園ではヘラジカが増えすぎたということで猿を放ったんですね。その結果、捕食者である猿によってヘラジカが減り、植物や土壌が再生されていったという話です。このように生態系のおかげで淘汰が行われると動物愛護団体はクレームを言わないんですよ。一方、理由はどうあれ人間が動物を駆除したとなると、やっぱり問題視する動物愛護関連の方は多くいますね。でも立場や視点が違いすぎて、簡単に結論が出る問題でもないのかなと思います。
 ——ここまで、奥多摩で暮らす方々のいろいろなお話が聞けて、大変、新鮮に感じました。最後に役場の三浦さんから、動物からの被害を感じた時の対処法についてお聞きします。
 三浦 ● 奥多摩といっても広いですが、エリア毎に動物の被害も頻度も異なります。私たちは常に現状を把握すべきだと考えているので、被害を受けたと感じたらその情報は役場までお知らせいただきたいですね。鹿の頭数をコントロールする上ではできるだけ多くのデータが必要です。イノシシや猿の被害報告はそこそこあるんですが、地域の暮らしを守っていくために、鹿からの被害についても報告をお待ちしています。
 ——みなさん、ありがとうございました。

矛盾してるけど、
美しい鹿の姿には
ほれぼれするんです。

THE HUNTER'S EYE

鹿と犬と、森の奥にて。

犬とともに鹿を追ひ、急峻な山の中を縦横無尽に歩き回る「勢子(せこ)」。グループで行う猟において、司令塔的役割をもつ重要なポジションだ。猟師歴3年、勢子歴1年の佐藤健一さんと共に、誰もいない森の奥へ。

まるで壁のように立ちはだかる、急峻な奥多摩の山々。奥多摩在住の猟師・佐藤健一さんは、そんな斜面をものともせず、道なき道を軽やかに登っていく。息のひとつも切らさないその逞しい姿は、屈強な山男か、はたまた、野生動物のようだ。「奥多摩に暮らして20年くらい経つけれど、猟師になってはじめて知った奥多摩の山の風景がたくさんあるんです。植林もできないような悪場(わるば※猟師用語で、急峻で歩きづらい道のこと)を歩いていると、手つかずの自然が色濃く残っていたりして。登山者や林業の人も入らないような山奥だから、この風景を見たことのある人間は、自分が初めてなんじゃないかって思ったり。北アルプスや南アルプスを登るのも楽しいけど、今は犬と一緒にこういう獣道(けものみち)を歩くのが楽しくて仕方がないんです」

目線の先には、クンクンと匂いをとりながら遠く先をいく、猟犬のナナコ。佐藤さんが全幅の信頼と大きな愛情を寄せ、頼もしい相棒だ。家具職人を本業とする佐藤さんが、狩猟免許を取得し、猟師になったのは約3年前。鹿による森の被害状況、猟師の高齢化などの問題を耳にし、「子育てや仕事でたくさんお世話になった奥多摩町に恩返ししたい」と考えたのがきっかけだったそう。奥多摩猟友会に入会し、最初は一般猟に参加。初めて銃で鹿を仕留めたのは、2回目の猟の時だった。「死んで開いたまま目を見て、本当に申し訳ないことをしたな、と。でも、血抜きのために心臓にナイフを入れ、解体を進めると、不思議と申し訳ないという気持ちより、ありがたいという気持ちの方が増えてきたんです。肉でこうやって手に入れるんだあって。無駄に殺すわけじゃない、食うために撃つんだからって、それからは「ごめんね」はやめました。ごめんねって、なんだか鹿に対して失礼。感謝しかないです」

元来、猪突猛進で凝り性のタイプ。奥多摩猟友会の駆除隊として活動する1年目から、メキメキと頭角を現し、捕獲頭数でもトップクラスの成績

を収めた。猟は、猟犬をコントロールし獲物を追い立てる「勢子(せこ)」と、鹿が追われてきたところを待ち受けて銃で撃つ「立間(たつま)」の二手に分かれて行われる。「勢子」は、いわば猟を統括する司令塔的な存在。一方で、優秀な猟犬を育てコントロールする技術と、最適な飼育環境を必要とするため、なかなか後継者が育ちにくいという側面も持つ。実際、担い手不足に陥っていた奥多摩猟友会で、佐藤さんが「勢子」として名乗りを上げたのは駆除隊2年目のことだった。

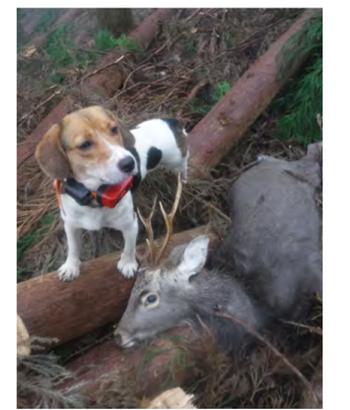
そこで譲り受けたのが、当時生後半年のナナコである。和犬とビーグルの血筋を持つナナコは、有名な猟犬ブリーダー出身。しかし、優秀な血筋だからといって、いきなり鹿を追ってくれるわけではない。最初は山の中で放しても、佐藤さんの傍を不安そうにウロチョロするだけ。一進一退を繰り返しながら、100m、200mと少しずつ距離を伸ばす訓練をし、仕留めた鹿を噛ませ、肉の味を覚えさせる。それをとにかく根気よく続けることで本能的欲求を引き出し、ある時から鹿を追うようになる。言葉の通じない相手ゆえ、「教えこむ」のは大変だが、その分、成長の喜びは大きい。「ナナコが追った鹿を初めて他の猟師が仕留めてくれたときは、本当に天にも昇るような気持ちでしたね。我が子が自転車に乗れた、みたいな。いや、それよ心の底から感謝の気持ちでいっぱいだったな。勢子になってからは自分で撃つ数は圧倒的に減ったけれど、自分が撃つかどうかはある意味どうでもよくて、ナナコが追った鹿を誰かが撃ってくれるほうが、自分が立間(たつま)として撃つよりもずっと嬉しい。勢子は、天職だと思います」

猟師と猟犬。その言葉面からは、緊張感のある関係を想像しがた。実際、古い猟師の間では、時に体罰を含む厳しい訓練を犬に課す文化が残っていることも。一方、佐藤さんのナナコへの接し方は、「人間扱いだよ。恋人、妻、愛人かな?」と本人も認めるほどの溺愛ぶり。言葉とスキ

ンシップでありつた愛情をぶつけ、ナナコの方もうっとりとした表情で佐藤さんを見つめ返す。見ているこちらが恥ずかしくなるほど。佐藤さんの家には、ナナコのほかに、2匹のペット犬、1匹の猫がいる。近い将来は、ナナコに子供を産ませ、猟犬を増やす計画もあるとか。根っからの動物好きなのだ。

「本当に矛盾していると思うんだけど、鹿のこともかわいくてしょうがないんです。勢子になってからは、生きている鹿に触れる機会もすごく増えて、一頭一頭性格が違うのが分かる。6~7歳くらいの立派なおスジカは猟師の気配を感じただけでビュッと逃げちゃうし、若い鹿なんかは好奇心があるから追われながらも、犬に興味を持って振り返ったりする。死んだ鹿を見ても、何年も生きてきたんだと思うと、愛おしくなる。濃密に触れる機会が増えて、どんどん好きというか、興味も湧くというか、愛おしくなるっていう不思議な現象が起きます」

誰もいない森の奥。遠くから、ナナコの動き回る音だけがすかすかに耳に届いてきた。



写真提供: 佐藤健一



Hunter 佐藤健一さん

20年前に神奈川県平塚市から奥多摩町へ移住。注文家具工務「エミケン」を立ち上げ、家具職人として活動。奥多摩を拠点に木製品・森林体験を提供する「東京・森と市庭」の木工担当を務める。2児の父。

奥多摩ハンター事情

鹿、イノシシなど有害鳥獣駆除を担う、奥多摩猟友会。猟師の高齢化が進む背景を受け、後継者を育てる目的から、奥多摩町では、有害鳥獣捕獲隊員の狩猟免許等取得費用に対する補助金が交付される。駆除は一年を通して行われるが、一般猟は11月15日から翌年の2月15日まで。

奥多摩に住んでいるとこんな話をよく聞く。鹿たちが草木を食べ、土を掘り起こすことによって、山林が荒れ保水力も低下し、土砂崩れが起きやすくなる、とか。あるいは食欲旺盛な鹿たちがさらにその数を増やし、草花を食べ尽くすことで山林では美しい花がどんどん減少している、とか。こうした影響からこの町では駆除の対象となっている鹿。奥多摩でこれからは健やかに暮らしていくには、とにかく鹿たちを減らさねばならないと考えている人が実に多い。でも、駆除だけが住民に残された唯一の選択肢なのだろうか。生物学者であり、研究のため自ら狩猟も行う新宅広二さんに話を聞いていく。

「本来、私たち日本人は自然環境に対して絶妙なバランス感覚を持っていたはずで、動物と人との棲み分けを実践していました。獣の住む奥山には踏み込まない、人里に我々は住む、そして人獣衝突地帯の里山といったように。今の時代、人間が野生動物に合わせていくといった思考も少し必要なのかなと感じています」

でも、鹿の食害によって山が荒れる、といった流れは早急に止めるべき課題だと考えている人も多いだろう。この点について、新宅さんはこう解説する。

「私個人は、鹿の食害で山が荒廃するというほどシンプルな話ではないと感じています。人間が行うべき山の手入れが疎かになってきていると

いう問題にもっと目を向けるべきですよね。もちろん鹿がトリガーとなって山の自然が損なわれていくというはあるかもしれませんが、でも一つの動物が、洪水など大災害を引き起こすような直接の原因になるようなことは、現実にはなかなかありません」

ではズバリ、奥多摩を人が永続的に暮らしていけるような町にしていくために、鹿に対してどのようなアプローチをすべきなのだろう。新宅さん個人の意見を聞いてみた。

「まず、鹿をはじめとした野生動物に今より目を向け、興味を持つことが大切ですね。鹿について少しでも知ることが、大きな問題を解決するスタート地点になっていくでしょう。私自身、様々な動物を世話したり、研究したりしていく中で、鹿という生物はトップクラスに可愛い美しい森の住人だと思っているんです。毎日、世話をすればなついてくれますし、山の中で出逢えばハンターでもある私でさえ、一瞬、その美しさにときめきます。繁殖期には雄が1頭に対して雌が数頭というハーレムを作るとか、そのような社会構造になっていることで効率良く数が増えることとか、ニホンオオカミのいない現在では天敵がいないことなど、どんな生物なんだろうという興味を持って、鹿を見つめるとまた考えは変わっていくかもしれません。たとえばタイではトラを頂点とした野生動物たちと共生していくとい

う考えが一般市民にも浸透しています。生態系の頂点が生息しているよう、高度な科学的なプログラムを策定し、保全と再生を長期計画で実践しようとしているわけです。奥多摩でどのようなアプローチをすべきかという問いに今、答えはありませんが、この場所は国の首都に属しているながら、鹿をはじめ、熊、猿、猪、カモシカまで住んでいる。極めて貴重なエリアであることは間違いありません」

もちろん、実害があれば駆除するという選択肢は当然と話す新宅さん。要点は、一律にルールを決めるべきではないということ。人々の暮らしと鹿との関係は地域によって様々。だからこそ、地域住民が日頃から野生動物との関係について深く考え、この先、どうしていけばよいかを議論し、地域毎に理想のゴールを設定していくことが求められると話してくれた。

「その場所に住んでもいないのに鹿が害獣だと決めつけるのは誤りだと思う。鹿だけでなく、猿や猪が自分たちの暮らしとどう関わっているのか。そして人間たちの生活を考えた時、野生動物や山林の環境をどうしていきたいのかを地域住民、小さなコミュニティの中で意見交換すべきです。理科教育的な側面から鹿を見れば寛容になれることもあるでしょう。結論として、未来を作るのはそこに住む住人なのだと私は思うんです」

Navigator 新宅広二さん

動物行動学者。生態科学研究機構 理事長・学術研究部門責任者。上野動物園、多摩動物公園などに勤務した経験も持つ。監修業では国内外のネイチャー・ドキュメンタリー映画や科学番組など、300作品以上を手がけたほか、動物園、水族館、博物館のプロデュースも多数、行う。「しくじり動物大集合/永岡書店」など著書も多数。

YOU HAVE ANY SOLUTIONS?

動物学者に聞く、
「理想的な鹿との付き合い方」とは?



奥多摩と鹿と、
これからの生活

YUMMY! VENISON!

鹿肉グルメを食べに行く

駆除した鹿は、ジビエとして食べて有効活用。高タンパク、低カロリー、鉄分豊富な鹿肉は、ヘルシーでありながら栄養満点。都内唯一の鹿肉処理場「森林恵工房 峰」で丁寧に解体処理された鹿肉は、町内5か所の食事処へ。それぞれに趣向を凝らした、こだわりの鹿肉グルメを堪能したい。



東京で最も標高が高い集落、峰集落の一角にある鹿肉処理場「森林恵工房 峰」(もりのめぐみこうぼう みね)

丹下堂 シカ肉定食 1500円

日帰り温泉も完備する、奥多摩湖畔に佇む食事処。遠方からこれを目当てに訪れる客もいるという「シカ肉定食」は、1日20食限定の看板メニュー。仕入れたシカ肉は、お店で丁寧に下処理をし、自家製の味噌ダレで味付け。熱々に焼いた鹿肉は、やわらかく臭みもなく、ヤミツキになる美味しさ。

奥多摩町原180
Tel.0428-86-2235
10:00~17:00
水休み



お食事処 ちわき 鹿の焼肉 1580円

大丹波川を眼下に望む、隠れ家的古民家レストランでは、一頭でわずかしかとれない、貴重なロース肉を焼肉にして提供。きめ細かい背ロースは、やわらかく、食べ応え抜群。単品の焼肉のほか、郷土料理のだんご汁、茶碗蒸し、ごはんとお漬物物をセットにした、「鹿の焼肉盆」(2650円)も。

奥多摩町大丹波618-1
Tel.0428-85-1735
11:00~17:00
水、第2水休み、冬期長期休業あり



Pick up!
奥多摩土産にも最適!
おくとまカレー 450円

奥多摩観光協会でも販売されている「おくとまカレー」は、奥多摩産の鹿肉と、奥多摩町の山間集落に100年以上前から伝わる「治助イモ」をたっぷり使ったご当地レトルトカレー。スパイシーかつ甘みを感じられる味わいで、子どもも大人も満足一品。



Cafe Kuala
おくとま鹿カツカレー 1200円

10種類のスパイスを調合した野菜ベースのオリジナルカレーに、ミディアムレアの鹿カツをのせた絶品カレー。お好みでオリジナルソースをカツにかけても◎。野趣あふれる味わいの鹿肉を粗く挽き、トマトなどたっぷり野菜とワインとともに煮込んだ「鹿肉のラグーソースパスタ」(900円)も人気。

奥多摩町氷川702
氷川キャンプ場内カフェクアラ
Tel.090-3518-2516
11:30~16:00
営業日は、4月~12月の土日祝日
および金曜(不定期)



水と緑のふれあい館「カタクリの花」
シカ焼肉定食 1500円

奥多摩の歴史や郷土芸能などを展示する「水と緑のふれあい館」の2階にあるパラマレストラン。数量限定の「シカ焼肉定食」は、ちょっと辛めのトマトソースが味の決め手。やわらかいのに歯応えがある鹿肉のおいしさが、いっそう引き立つ逸品だ。ヤマメなど地元食材の定食やうどんなど豊富なメニューを取り揃える。

奥多摩町原5
Tel.0428-86-2733
10:00~17:00 水休み



奥多摩リバーサイドカフェ AWA
ベニソンボルケーノ 2200円

じっくりと低温調理した、ローストビーフならぬローストベニソンがご飯のうえにてんこ盛り。甘みのある醤油でシンプルに味付けをし、薬味に奥多摩わさびを添えて提供。鹿肉は、奥多摩産、兵庫県産、山口県産の3種類を取り扱い、風味の違いも楽しめるという。多摩川の清流を見渡すカフェは、居心地抜群。

奥多摩町川井54-1
Tel.0428-74-9947
10:00~16:00
月休み ※月曜が祝日の場合は翌日休み
※営業時間および定休日は時期により変更あり

FICTIONAL INTERVIEW

「シカ？ いえ、カモシカです」

特別天然記念物(国指定)に指定されるニホンカモシカだって奥多摩には住んでいる。でも、彼らはシカのように見えて実はウシの仲間。そんな神秘的な存在、カモシカへの架空インタビュー。

Photo: Masaki Okabe



I Like To Be Alone...



ふと気配を感じるとすぐそばにカモシカが…。奥多摩ではこんな光景がさほど珍しくない。シカと異なりこちらがじっとしていれば長い時間、観察することも可能だ。

この角は一生、生え変わらないんだ。

「どうもこんにちは。僕、奥多摩のカモシカです。正式には日本固有種のニホンカモシカ。名前は似ててもシカと違って、ウシ科に属するんだよ。だからシカっぽいけどシカじゃないんだよね。たとえばニホンジカは基本的に群れて生活するでしょ。だけど僕は単独で縄張りを作って暮らしているから、4頭以上が固まって目撃されることはほとんどないはずさ。あとニホンジカは交尾期とかによく鳴くけど、僕はほとんど鳴かない。そうそう、僕はオスでもメスでも角があって一生、生え変わらないけど、ニホンジカはオスしか角がなく、しかも毎年、生え変わるんだよね。結構知らなかった人、多いんじゃないかな。」

奥多摩での毎日の生活?基本的には食べて、休んでの繰り返しだけどのんびり屋なんて数時間、じっと座りっぱなしなんていうシーンを人間に目撃されたこともあるよ(笑)。だから僕らをじっと観察するのはそう難しくはないよね。特別天然記念物ってことで人間は僕らをハンティングしたりすることがないでしょ。だから僕らも安心して暮らしていて、警戒心も少ないんだ。僕らとの遭遇確率は比較的高いってことでいえば、こんなデータもある。奥多摩町には約5000人が住んでいて面積は約226平方kmだから、1平方kmあたりざっと22人の人間がいることになる。ある調査によれば、奥多摩町には僕らカモシカが1平方kmあたり1頭の割合で暮らしている。人間22人に対してカモシカ1頭だからね。町で時々僕らと遭遇するのもそんなに珍しいわけじゃないんだよ」

Profile
カモシカ/Serow

シカよりもヤギに似た反すう偶蹄目ウシ科に属する日本固有種。険しい山岳地帯や混交樹林に生息する。1955年には3000頭と推定されたが、手厚い保護政策が実り、その後、生息数は増加。現在では全国におよそ20万〜30万頭ほど生息するとされている。

奥多摩町に暮らす

自然がいちばん濃いTOKYO

都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

ミニ・インタビュー 関大樹さん・舞さんファミリー



奥多摩町から約1時間。西多摩郡瑞穂町の市街地に暮らしていた関大樹さん(30歳)と、妻の舞さん(30歳)は、3児の親。2020年2月に奥多摩町に家族5人で移住をしたが、奥多摩町を選ぶ決め手となったのは「子育てのしやすさ」だったそう。「保育園の待機児童がないのがまず嬉しい。医療費や給食費の全額支給など、子育て支援も色々と充実しているところも助かります。それと、小学校からタブレットで授業をしたり、海外派遣事業があったり、少人数だからこその手厚い教育が受けられる点も魅力」と、妻の舞さん。趣味のバイクツーリングで奥多摩へもよく訪れていたという大樹さんも、「やっぱり自然が豊かなところがいい」と満足気だ。2019年4月に開催された奥多摩町主催の移住・定住相談会に参加した2人は、実質無償で土地付き住宅を譲与する「いなか暮らし支援住宅」に応募。晴れて希望物件への入居が決まった。築35年ほどの中古住宅は、四季に色づく山々の景色が楽しめる抜群の立地。夫婦で協力しながら、日々、コツコツとDIYを手がけている。オーダーメイドシルバークラフトショップ「Alsomitra」を営む大樹さんは、敷地の一角に小さな工房を建設予定だ。「奥多摩は、都市に暮らす人にとっては非日常な場所。彫金体験や革細工など、思い出に残るようなものづくり体験の場にもしていきたいと考えています」。



いなか暮らし支援住宅とは?
定住を考えている子育て世帯(※入居申込時における世帯主の年齢が40歳以下の夫婦あるいは、50歳以下の方で子ども[高校生以下の方]がいる世帯)を対象に、空家を活用し、15年の定住で、実質無償で土地付き住宅を譲与する住宅のこと。今年度も新しく申し込み希望者を募っている。



— Welcome to —

OKUTAMA TOWN

東京の森林へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

移住・定住応援補助金
奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした方に対して、事業費10万円以上で、事業費の1/2以内、最大200万円の補助金を交付します。事業補助金の限度額200万円を超えて、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える各々10万円ずつの商品券を上乗せして補給します。
1) 奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合
2) 壁、床等に地場木材(多摩産材)を10㎡以上使用した場合
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
●45歳以下の夫婦 ●18歳以下の子どもを持つ世帯 ●35歳以下の方

住宅資金借入の利子補給
奥多摩町に定住を目的とした住宅の購入・リフォーム等をされた方に、金融機関などからの資金借入に対する利子補給を行っています。条件は、400万円以上の融資を受け、償還期間が10年以上であること。町内金融機関を利用する場合は、最大年額33万円まで補給します。給付期間は36カ月。
◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
●45歳以下の夫婦 ●18歳以下の子どもを持つ世帯 ●35歳以下の方

子育て支援
子育てのしやすい町をめざし、町独自で15項目の子育て支援事業を行っています。入園・入学・進学等の支援や、保育料をはじめとした学校給食費、中学制服代、高校生進学定期代など、子育てを頑張っている方への負担を軽減するための助成があります。また、都の制度を拡充し、所得基準を超えた世帯にも医療費を全額助成します。

お問い合わせ：奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 <http://www.town.okutama.tokyo.jp>

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel], Piroshi Utsunomiya [miguel], Art direction: Atsushi Kodani Illustration: Toshiyuki Hirano
発行:東京都奥多摩町 <http://www.town.okutama.tokyo.jp> 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp <http://www.miguel-web.info>
2020年3月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、JR青梅線各駅構内、都内協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。
Cover story: 奥多摩でも鹿による被害は深刻だ。でも、森での彼らの姿を想像すると、やはりどこかロマンチックだ。

